

日本書紀を

訪ねて

神代編

黄泉国

熊野地方(三重・和歌山)

紀伊半島に位置し、三重・和歌山両県にまたがる熊野地方は温暖多雨の地で、うっそうとした山地が広がる。古来、神々がすみ、異界に通じる聖地と信じられ、現在、広い範囲が世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」(2004年登録)となっている。

熊野地方の三重県熊野市有馬町は、日本書紀(720年成立)が「一書に曰く」として伝えるイザナミノミコトの葬送地へ紀伊國の

熊野の有馬村(有馬)といわれる。海岸から2km弱内陸にある産田神社と、海沿いの巨岩「花の窟」を御神体とする花の窟神社を結ぶ一帯が、伝承の舞台だ。

日本書紀は、イザナミが火の神のカケツチを生んでやけどを負い、死んでしまったとする。二つの神社の宮司を務める山川均さん(66)は「地元では、伊弉冉尊が

神を生んで、亡くなった場所が産田神社で、葬られた地が花の窟だったと伝わります」と話す。

いずれも小さな社だが、産田神社には石で組んだ祭祀台の遺跡があり、花の窟神社にそびえる高さ約60mの巨岩は、見る者に畏怖心を抱かせる。花の窟はたぐさんの花でまつるのでこの名がある。

イザナミの死後、イザナキは妻に会うために死者の世界、黄泉国に行く。日本書紀は別の「一書」

に沿って、その様子を描く。

【よみのくに】 国土と山川草木を生んだ夫婦神の伊弉冉尊と伊弉冉尊は、続いて天照大神や月読尊ら多くの神々を誕生させる。だが、伊弉冉尊は阿遲突智(火の神)を生んだ時、やけどを負って死ぬ。伊弉冉尊は妻に会おうと、死者の世界である黄泉国に赴くが、姿を見ないでほしいという懇願を聞かずこのぞき見し、腐乱した妻の姿におじけつき、黄泉国から逃げ出す。



神々しい山道 異界との境



花の窟神社は木々に囲まれている。右側の白い岩が御神体で、岩から連してある大綱には、神と人をつなぐという意味がある（三重県熊野市で）

黄泉に入りて、及きて共に語りたまふ。時に伊弉冉尊の曰はく、「吾が夫君の尊、何ぞ来ますことこの晩きや。吾已に黄泉之窟しつ。然りと雖も吾寢思まむ。請ふ、な視たまひそ」とのたまふ（黄泉国に入り、迫り着いて共に語りたまふ。その時に伊弉冉尊が、「我が夫君の尊よ、どうして遅く来られたのですか。私はすでに黄泉国で煮炊きした食物を食べてしまいました。しかし私はこれから寝ようと思ひます。お願ひですから、私をご覧にならないでください」と仰せられた）

イザナキは妻の願ひに背き、櫛の歯をたいまつにして姿を見てしまふが、うみが出て、ウツガがたかるさまにおののき、逃げ出す。怒ったイザナミは、追っ手として8

人の鬼女（泉津醜女）を放ち、自らも追う。だが、イザナキは黄泉国と生者の世界との境（泉津平坂）にたどり着き、逃げ切る。

この泉津平坂だといわれる場所が、有馬町の二つの神社の中間付近、急な山道を十数分登った山中にある。樹木の太い枝や根がうねるように伸び、昼でも薄暗く、転がる大岩はこけむす。冷気が漂い、静寂の中で時折、木々が風に揺れる音がする。深入りすると戻れなくなりそう、怖くなる。

「伊弉冉尊は花の窟の方から逃げてここにたどり着いた、黄泉国から帰る、よみがえったのだと伝承されています」と山川さん。地元ではこの地点を「日初様」と呼ぶ。泉津醜女のシコメが転じてヒソメになったといわれる。

考古学者で元同志社大教授の辰巳和弘さん（左）は「出雲国風土記にも黄泉の坂や黄泉の穴が出てきます。古代の人々は深い山や洞穴、海辺の岩陰に、あの世との境をイメージしたのでしょう。熊野では死者の靈魂の行き先として、南側に果てしなく広がる海も意識されていたと思います」と話す。

紀伊半島は、千数百年にわたり、神への信仰や修験道、浄土思想などが重なり合い、祈りの場となってきた。日本書紀の神話は、そんな重層的な信仰の一番古い層を見せてくれる。（渡辺達治）



● 読売新聞オンラインに動画



読み下し文と現代語訳は小学館「新編日本古典文学全集」から

* 「日本書紀を訪ねて」は「史書を訪ねて」と交

e



□ **【アクセス】**
 JR紀勢線熊野市駅から三重交通バスに乗って約9分で、
 花の産停留所。花の産から龍田神社まで歩いて約25分。
 □

イサナシロで造られたイサナキが養蚕園と年々
 の成長との境「養蚕垣」(イサナシロの垣)を
 築いた、と伝わる山の中。もみ出になった
 木の根や落み合うように伸びた枝が山道(左)
 を覆う(三重県熊野市) ■河村道徳撮影